

2011年4月

## 「コリグ」44号 目次

巻頭言（1～3） 戦略的研究プロジェクト（3～6） 第38回研究員集会報告（6）  
大学教授職の変容に関する国際会議報告（7） 特別研究報告（7～8）  
頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム（8～9） 高等教育公開セミナー報告（9～10） 2010年度の公開研究会（10） センター往来（11） 新任者・離任者から一言（11～18）

## 巻頭言



### アノミー時代の実相

潮木 守一

（名古屋大学・桜美林大学名誉教授）

第二次世界大戦が終わると、世の中がすべてリセットされた。富める者も貧しき者も姿を消し、日本人全員が等しく貧しき者となった。以前は雲上人だった皇族も同じだった。ある皇族の一員が満員電車で通勤していた時期があった。ある日、満員電車のなかでは、乗客同士の口論が始まった。「そんなに押すな」。「そんなことをいったって、後ろから押してくるんだからしょうがあるめー。今じゃ皇族だって同じ満員電車に乗る時代なんだから、文句いうな」。「皇族がなんだ。俺達と同じ人間じゃねーか」。「さては貴様、キョーサントーだな」。こういうやり取りを聞いていた乗客がどっと笑い声をあげた。それで喧嘩口論は納まってしまった。

満員電車は早い者勝ちの世界だったが、それとはまったく別な世界が開けようとしていた。それが中学校の世界だった。1947年4月から制度が切り替わり、小学校を卒業した者は全員そのまま無試験で中学校に進学することになった。それまで中学進学といえば、厳しい入試がつきものだった。とくに名門中学への入試は激甚を極めた。ところが新制度のお陰で、中学校はエスカレーター式に入れる学校となった。

この改革は戦前までの「封建制」を克服し、「民主主義」を象徴するものと説明された。事実その頃「新しい憲法の話」というパンフレットが子供達に配布され、これからは偉い人も貧乏な人もいない、すべての人が平等な社会がくるのだと教えていた。

ただこうした価値観の転換は、それほどスムーズに進んだわけではない。それを象徴したのが1946年に行われた「教科書の墨塗り」措置だった。一夜にして価値観が逆転して、新しい時代に沿った教科書が必要となった。ところがあらゆる物資が不足していて、教科書の編集・印刷が間に合わなかった。子供達の手元にあるのは、兄姉、先輩から譲り受けた教科書である。まさに戦時色濃厚な国定教科書だった。そこで急場しのぎの措置として、

No. **44**

古い教科書のうち、不都合な箇所を教師の指示にしたがって一斉に墨で塗りつぶす作業が始まった。

この墨塗り経験が子供心にどのような痕跡を残したかは人によって違うのだろう。ある者は抵抗感なしに、教師の指示通り淡々と作業を進めたという。またある者はどうしてこう簡単に大人の言うことが逆転するのか、不思議に思い、ある種の反発心を育てた。小学校高学年ともなれば個人差がある。地域差もあったことだろう。価値観の転換は必ずしもスムーズに進んだわけではない。

ある師範学校の付属小学校では、こういうことが起こったという。戦中から食糧難が続き、戦後はそれがさらに加速された。その付属学校でも、校庭は芋畑に変わった。収穫されたサツマイモは先生達の食糧となり、職員会議は焼き芋を食べる会となった。すきっ腹を抱えていた子供達のもとにも、焼き芋の香ばしい香りが伝わったことだろう。小学校高学年の子供達は「イモクイ会議はやめましょう」といって職員室の前をデモ行進したという。付属小学校とは普通の学校ではない。オボッチャマ学校である。そのような学校でも教師の権威が、崩れようとしていた。

民主主義の到来とともに、決まり文句となったのが「自主性」だった。これからは上からの命令で動くのではなく、何ごとも生徒が自主的に行動しなければならない、これがうたい文句だった。しかし昨日まで教師の命令で動いていた者が、急に「自主的」に動けと言われても、どうしたらよいのか分からない。筆者の体験を話した方が、その当時の雰囲気がわかるだろう。

1934年生まれの筆者は1947年からは新制中学校の一年生になった。私の中学校は旧陸軍の兵舎を転用したのだから、途方もないマンモス学校だった。1年生が何人いたのか定かではないが、ともかく私の学年は14学級に分かれた。ある日までは朝礼が終わると、戦争中と同様、教師が「朝礼はこれで終了。全員教室に向かって前へ進め」という号令で済んでいた。ところが我々生徒の知らないところで、そういう命令がよくないという話になったらしい。

ある日朝礼が終わったところで、教師が「1年1組の級長。前へでてこい」と命令した。1年1組の級長とは他でもない私のことである。何のことかと思って前へ出て行ったところ、「お前、これから朝礼台にたって、“朝礼は終わりました。みなさん教室に帰りましょう”といえ」と命令された。全校生徒の視線に晒されるのは、あまり気持ちのいいことではない。しかししかたがない、朝礼台の上に立って、全員の視線の集中するなかを「朝礼は終わりました。みなさん教室に帰りましょう」といった。

だいたい朝礼台に生徒が立つのは、全校生徒の前で見せしめのために罰を受ける時だけであった。ところが一年生坊主が出てきて、何だか訳のわからないことをいっている。全校生徒はキョトンとしている。しかたないので、同じセリフもう一度繰り返した。今度はキョトンとしているのではなく、ゲラゲラ笑いだした。しかたなくもう一度同じセリフを繰り返したところ、ゲラゲラ笑いが全校生徒に広がった。

いつまでも大勢の視線の晒し物になるのはかなわない。かくなる上はと覚悟を決めて、私は命令を発した。「本日の朝礼はこれで終了。全員前に向かって前へ進め！」。それを聞いて「それならばじめからそういえばいいじゃないか。“教室に入りましょう”などと間の抜けたことをいって」と私をからかいながら級友達は教室に入っていった。

ところが悲劇はまだ続いた。ほうほうの体で朝礼台から降りてきた私に向かって、教師が血相を変えて怒鳴りつけた。「あれほど命令はいけないといったじゃないか。それをあの命令は何だ。これからは生徒が自主的に動かなければいけない時代になったのだ」。こうやって私は「自主性」を頭ごなしに教え込まれた。

教科書の墨塗りも、この頭ごなしの「自主性」も、大人に対する不信感を育てただけだった。それは「イモクイ会議は止めましょう」とデモ行進をした付属学校の子供達と同じ心象風景だった。それ以来、人間にとって価値とはどういう意味を持っているかが気になりだした。私が物心ついた頃、古い価値は地に落ち、それに代わる価値は依然として見えなかった。我々世代はこの価値の空白時代を過ごした。

「自主的に動く」ことは、一皮むけば「やりたいことをやって何が悪い」というのと同じことになる。1957年石原慎太郎の「太陽の季節」が発表された時、世間は驚いたが、湘南地方ではしばしば耳にする話だった。「処刑の部屋」(集団レイプ事件)が出た時は、大人達は腰を抜かし眉をひそめたが、これま

たよく聞いた話である。だからあの頃、天野貞祐とか高坂正顕といった碩学が教育勅語の戦後版を作ろうとしたのだろう。1950年とは朝鮮事変が起こり、日本経済が戦争ブームに沸いた年だった。特定の家庭に大金が転がりこんだ。1950年代の湘南地方とは、貧しい戦後日本にはじめて豊かさの光が差し込んだ土地だった。金はいくらでもある、しかし頼るべき価値観がないとなれば、いくらでも野放図な行動に走ることができた。自動車、ヨット、別荘、ダンスパーティ、ドラム、ギター、トランペット、何でも手に入った。それがアノミー世界の舞台となった。外からは無軌道、勝手放題、放縱に見えても、当人達の内面には怒りとやりきれなさ、絶望が渦を巻いていた。石原慎太郎は晩年「太陽の季節」をテーマに卒論を書いている女子学生に出会い、「あの小説はきれいだから」と告げられ、絶句している。たしかにあの主人公のなかには、ある種の悲しい美しさがある。

変転極まりない時代の流れのなかで、若者はおもくちやにされる。現代はその最たるものだろう。若者は怒って当然である。それにしてもこの現代の無風状態は何なのだろうか？

## 戦略的研究プロジェクト

### ◆◆◆ 2010年度活動を振り返って ◆◆◆

プロジェクトリーダー：山本 眞一  
(高等教育研究開発センター長)

この研究は、当センターの組織的研究活動の最重要な柱で、正式には「21世紀知識基盤社会における大学・大学院改革の具体的方策に関する研究」と呼ばれるものです。2010年度は5年計画の3年目で、研究活動は佳境に入りつつあります。この研究は、文部科学省特別研究経費（戦略的研究推進経費）を得て行うもので、わが国の大学・大学院を21世紀知識基盤社会にふさわしい形に改め、地域や世界に貢献する高度な能力を備えた人材を養成しうる高等教育システムを構築するため、「経済財政改革の基本方針2007」（2007年骨太の方針）を踏まえ、大学・大学院改革のための具体策に関する研究を行うことを目的としています。我々は、この研究を「戦略的研究プロジェクト」と略称し、研究員や支援職員の方々を始め、多くの方々のご支援を得つつ、活動を進めてまいりました。

2008年度に大学院問題の解明からスタートし、①世界トップレベルの大学院教育の改革、②知識基盤社会における人材養成と教育の質保証、③高等教育の国際化・多様化と機能・役割分担、の三つの観点を視野に収めつつ、それぞれの問題の解明をさらに深化させてまいりました。このため、前年度までは、大学院の現状や課題を主として国際比較の観点を中心におこなう「比較班」と、わが国の大学院の現状を各種のデータによって検討・検証する「実証班」に分けて研究活動を行ってまいりましたが、今年度はこの区分けにこだわらずさまざまな研究班を構成しながら、活動分野を広げるようにしました。

この間、2010年11月10日から3日間、「高等教育のユニバーサル化と大学の多様化」と題して、国際ワークショップと研究員集会を開催しました。3人の海外からの招へい者を含む4人の講演者から有益なお話を伺い、また活発な意見交換が行われました。3人の海外招へい者は、ニューヨーク州立大学バッファロー校のブルース・ジョンストン名誉教授、中国清華大学副学長の謝維和教授、ノルウェー・オスロ大学のピーター・マーセン教授で、日本からは早稲田大学の吉田文教授に講演をお願いしました。これらの議論は、毎年定期的で開催している研究員集会にも引き継がれました。さらに2011年3月9日には、「欧州の質保証とその政策過程に関する研究会」を東京で開催し、ポローニャ・プロセスを中心とした各国の質保証やその政策の浸透・波及の状況について、当センターの教員のほか、他機関の専門家の方々もお呼びして研究発表を行いました。予想を超える多数の参加者があり、この問題に対する関心の高さを再認識いたしました。

さらに2010年4月16日には、今年度の研究活動を総括して、東京都内での成果報告会を予定しています。基調講演を兼ねて私から「知識基盤社会と大学」と題する話しをするほか、大学院教育の改革、質保証

の在り方の国際比較、大学教員の教育活動の現状と課題、大学教員の国際化などの課題に則して当センターの教員から研究発表が行われる予定です。コメンテーターは国立教育政策研究所・高等部長の塚原修一先生に依頼しており、当日は活発な意見交換が行われるものと期待しております。

いずれにせよ、現在、高等教育システムは大きな転換点にあります。それは単に現政権下における諸政策の混乱にのみ原因があるわけではありません。中・長期的には、グローバル化、知識基盤社会、18歳人口の減少などをキーワードとする非常に大きな変化への対応が必要であり、それらに向けて、大学院の充実、質保証、国際競争力の確保、大学経営力の強化、教育や研究モードの転換、雇用と教育との整合性などの対策が必要です。また、これらを支える高等教育研究それ自身の改革・発展も必要ではないかと思えます。昨年のニュース・レターにも書きましたように、「基礎的な知見の上に現実を解明し、将来を見通すこと」がますます高等教育研究に期待されていることであり、また我々の役割ではないかと考えております。

戦略的研究プロジェクトは、計画期間の後半にさしかかりました。研究員の皆さんには、これまで以上にご支援のほど賜りますよう、お願いいたします。

## ◆◆◆ 大学院教育の研究 ◆◆◆

福留 東士

(高等教育研究開発センター准教授)

大学院教育の研究は、戦略的研究プロジェクトの中核をなすテーマとして、2008年度のプロジェクト開始当初よりセンターを挙げて取り組んできたテーマです。日本の大学院は、知識基盤社会を支える基幹的・戦略的な教育機関として、1990年代以降、重点的な施策が展開され、修士、博士、専門職いずれの課程も近年、大きく入学者が増加しています。一方で、特に博士課程については修了者の修了後の状況が必ずしも芳しいものとはいえず、すでに飽和状態にあるのではないかという議論も聞かれるようになってきました。アメリカでは最終学位によって生涯賃金に大きな差が出るのに、日本では大学院で取得した学位は社会的にあまり評価されないともいわれています。しかし、少し前であれば、工学系を除いて大学院修了が就職に際してほとんど有利に働かないとされてきたことを考えれば、大学院修了者の就職者の実数自体は大きく伸びており、状況は次第に変化しつつあると捉えることもできるでしょう。調べてみれば、日本の大学院教育は、さまざまな課題を抱えながらも新たな展開を目指す変革の途上にあるといえるのではないのでしょうか。

大学院教育の問題は多岐にわたり、大学院の需給関係と修了後の進路の問題、教育プロセスとしてのコースワークや研究活動・指導のあり方、大学院生の位置付け（学生 or 研究者 or 被雇用者）と経済的支援のあり方、開放性・流動性・柔軟性の問題などを考慮に入れる必要があります。戦略的研究プロジェクトでは、これまで国際比較をひとつの機軸としつつ、こうした点について日本の大学院教育の現状について検討してきました。とりわけ、国際比較においては大学院の先進国である米国との比較を重要な軸としながらも、コリグ諸氏のご協力を仰ぎながら、欧州、アジア各国において大学院教育のあり方が急速に変化しつつある状況についても幅広く検討を行ってきました。

そうした中で、国際比較に基づく日本の大学院教育（特に研究者養成を担う博士課程教育）の特徴を挙げれば、以下のような点を指摘できると思います。博士論文執筆の要求、必修のコースワークの履修はいずれも国際的にみると低い水準にあるが、いずれも近年、大きな変化がみられる。教員による研究指導は、他国と比較するとそれなりに手厚く行われているが、教員や上級研究員との共同研究の機会は限られている。奨学金の受給状況は決して低くはないが、フェロウシップ等を含めた経済的支援を他国と比較するとその水準は低い。雇用契約はほとんど行われておらず（ただしここ数年で徐々に拡大しつつある）、他国では多くの大学院生が教育研究に関わる雇用契約を結んでいるのに対し、日本の大学院生は雇用されて教育・研究を行う者ではなく、文字通り「学生」として位置づけられている。

各国の大学院教育のあり方は多様であり、上記の比較についてもより慎重な検討が求められます。何が改革されるべき課題で、何が維持されるべき日本の特質なのか、これまでの検討を基礎にさらに探究を深めていきたいと思えます。

## ◆◆◆ 質保証について ◆◆◆

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

本年度は、質保証について各国担当の者が個別に研究を進めつつ、適宜内部での情報交換等を図った。また3月9日に、戦略的研究プロジェクトのボローニャ・プロセス研究に関連して、外部講師を招聘して研究会を開催した。

昨年度の外部講師による報告を含めて、年度末に質保証に関する報告書をまとめる予定である。

## ◆◆◆ 大学院における教員の勤務実態に関する調査研究 ◆◆◆

大膳 司

(高等教育研究開発センター教授)

「大学院における教員の勤務実態に関する調査研究」は、平成21～22年度の文部科学省先導的大学の改革推進委託事業である。

近年の高等教育を巡る激しい環境変化の中で、大学に期待される役割は増大かつ高度化の傾向があり、教員が行わなければならない業務は複雑多岐にわたっている。特に我が国の教員は、米国に比べて支援スタッフの数が少ない中で、本来業務である教育・研究だけでなく、大学の経営・管理に係る様々な業務を抱え込んでいる。さらにこれらの業務処理には煩雑な学内手続きやペーパーワークが多く時間と手間を要するなど、その設計自体に問題があることも少なくない。これらにより、教員には多忙感が増しつつあるが、その解決のためには、教員の勤務実態を把握するとともに、教員が果たすべき役割の再配分や大学における教育・研究を含む諸業務の処理体制の見直しが必要である。本調査研究は、教員の勤務実態を的確に把握することにより、知識基盤社会の中で大学院教育と研究に注力すべき教員の業務実施の集中と効率化に資することを目的として行ったものである。具体的には、教員の勤務実態に関する先行研究について調査、国内の約10大学を対象とした訪問調査、米国の6大学を対象とした訪問調査、我が国の200の専攻及びその所属教員に対して実施したアンケート調査を行った。

この目的を達成するために、山本眞一（本センター長）、大膳司（本センター教授）、渡邊聡（本センター教授）、村澤昌崇（本センター准教授）、李敏（本センター研究員）、長谷川祐介（大分大学教育福祉学部講師）で、論点整理、調査企画、分析を行った。その際に、小林信一氏（筑波大学大学研究センター教授）、塚原修一氏（国立教育政策研究所高等教育研究部長）、竹内淳氏（早稲田大学先進理工学部教授）から専門的見地からの助言をいただいた。また、国内および米国の大学等の訪問調査およびアンケート調査の業務支援を受けるため、これらの作業の一部を（株）三菱総合研究所に外注した。

なお、現在、調査研究の成果を今まとめている最中である。本調査研究の報告書を平成23年度中に本センターのホームページ内に掲載する予定になっているのでご覧いただきたい。

## ◆◆◆ 大学の国際化 ◆◆◆

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2010年度に、戦略的研究プロジェクトの一環として、国際班の大膳司、秦由美子と筆者が留学生、教育プログラムおよび大学教員の流動を中心に大学の国際化について、それぞれのテーマに沿って以下の研究を進めている。

まず、大膳は主として「世界の留学生の移動状況とその背景」について調査している。その目的は、留学生の送り出し国と受け入れ国の状況を分析することにより、現在、世界の留学生はどのように動いているのか、なぜそのように動いているのかについて明らかにすることにある。その目的を達成するための国別の留学生の送り出し人数と受け入れ人数の基礎データとして、UNESCO Institute for Statistics でまとめている1999年から2009年の212カ国間の留学生の送り出し人数と受け入れ人数のクロス表 (Table 18: International flows of mobile students at the tertiary level) を使った。なお、使用するデータは、ユネスコからのデータ提出の依頼に対して、回答可能な国がデータを提供することで作成されたものであるため、全ての国のデータがそろった年はない。そこで、1999年から2009年までの各国

のデータの平均値を求めて使用することにした。データ分析の視点は3点で、1点目は、受け入れ留学生数の国別比較、2点目は、送り出し留学生数の国別比較、そして3点目は、受け入れ留学生数と送り出し留学生数の状況から、何が学生の移動を招いているかを、その要因を明らかにする。

次に、秦は、基本的には「連合王国の国境を越えた教育（TNE）」について論ずる。その中では特に、TNEの実施形態、地域別TNE、高等教育機関のタイプ別・規模別TNEプログラム、研究レベル別TNEプログラム、実施されるTNEの教科、連合王国のTNEが展開されている国々の特徴、そしてTNEを実施している相手国の特徴についての調査を実施した。他に連合王国で学ぶ海外留学生に関して、海外留学生への公的補助金、ブレア政権時の留学生政策等についても論ずる。

最後に、筆者は「日本における大学教員の国際化—外国人教員および研究者数の変化を中心に—」について取り上げる。具体的には、国際的・比較的な視点から、日本の大学教員市場はどの程度外国人に開放し、またどのような外国人としての大学教員と「教授」在留資格をもった外国人を受け入れ、さらに、日本の大学教員の国際化において彼らはどのような役割を果たしてきたかについて検証することである。その分析視点として、日本の大学の外国人教員の変化について、主に設置者別、種類別、職階別、男女別で分析する。また個別機関のデータに基づいて、在日外国人教員の実態も検討する。今後、関連データを収集しながら、同じ非英語圏としてドイツや、オランダ、フランス、中国と韓国等も対象に比較研究を進めることを通して、世界の大学教員の流動状況および関連諸国における大学教員市場の国際化について明らかにする予定である。

## 第38回研究員集会報告

### 「高等教育のユニバーサル化と大学の多様化」

大膳 司

(高等教育研究開発センター教授)

「高等教育のユニバーサル化と大学の多様化」のテーマのもと、平成22年11月11日・12日に、第38回研究員集会を開催した。

グローバル化や知識基盤社会の到来という大きな社会変動のなかで、大学は、社会に対しその存在意義を明確に示す必要に迫られている。一方、大学の大衆化・ユニバーサル化の中で、大学に求められている役割はますます大きくかつ多岐にわたりつつある。本研究員集会では、大学がこれらの状況に対応していくためには、大学としての本質を意識しつつも「多様化」していくことが重要な解決手段ではないか、との前提で議論を展開していった。

徳永保氏（国立教育政策研究所長／前文部科学省高等教育局長）と天野郁夫氏（東京大学名誉教授）から基調講演が行われた。

徳永保氏からは、「ユニバーサル化・多様化する大学と高等教育政策」と題した講演が行われた。また、天野郁夫氏からは、「高等教育のユニバーサル化と大学の多様化」と題した講演が行われた。

翌日は、午前中、「高等教育のユニバーサル化と大学の変容」をテーマとしてセッション2が開催された。まず、山本眞一センター長からこの度の研究員集会の趣旨説明が行われた後に、福留東土（本センター准教授）、小林哲夫氏（朝日新聞出版『大学ランキング』編集部）、島一則（本センター准教授）の3名から報告があった。

まず、福留からは、「米国を通してみる大学の多様性—カーネギー大学分類を手掛かりとして—」と題する報告を頂いた。小林氏からは、「ランキングから見た大学改革のキーワード—改革の方向性が大学多様化を促すとき—」と題する報告を頂いた。最後に、島からは、「国立大学の機能と自大学認識—ユニバーサル化・多様化のもとでの機能別分化をめぐる—」と題する報告を頂いた。

午後からは、矢野眞和氏（昭和女子大学）のコメントを含めた総括討論がおこなわれた。

講演、報告、総括討論の内容は、紙幅の関係で省いたので、関心のある方は、現在、研究員集会の記録を『高等教育研究叢書113号』としてまとめているので、そちらを参照していただきたい。



## 大学教授職の変容に関する国際会議報告

### 「アジアにおける大学教授職の変容—その背景、現実と傾向—」 (The Changing Academic Profession in Asia: Contexts, Realities and Trends)

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2011年2月5日から6日にかけて、広島大学・高等教育研究開発センター、文部科学省科学研究費補助金「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」(研究代表者:有本章[広島大学名誉教授,現比治山大学・高等教育研究所長])主催,比治山大学・高等教育研究所共催により,アメリカ,韓国,中国,タイ,台湾,ドイツ,マレーシアおよび日本国内から約60人の研究者と参加者が出席し,「アジアにおける大学教授職の変容—その背景,現実と傾向—」を題目とする大学教授職に関する第5回目の国際会議を開催した。

この会議では,四つの基調講演および九つの一般報告が行われており,歴史的,比較的小および実証的視点などに基づいて特にアジア関係諸国における大学教授職の形成,変化および特徴に関して取り上げた。例えば,基調講演において,文科省の榎本氏は日本の高等教育改革に関する背景を整理したうえで,現在進行している改革の主な内容,課題および今後の傾向について述べた。有本教授は日本の視点から世界関係諸国における大学教授職の状況,特に日本のその位置づけを分析し,また日本の大学教授職をめぐる問題点の解決に向けて政策的提言も行った。カミングス教授はアジアにおける研究型大学の出現を題として,この先十年間,アジア地域において異なった学術システムが形成され,また各国では特色あるシステムが構築されることを予測した。タイヒラー教授は,大学教授(seniors)と若手スタッフ(juniors)別に2007年のCAP調査に参加した中国,マレーシア,香港,韓国および日本の結果分析に基づいて,社会的状況や,仕事環境および教育と研究活動などの側面からアジア型大学教授職の特徴について比較研究を行ったうえで,アジア型大学教授職が存在しないと断言した。

一般報告において,主に以下の内容について議論された。具体的には,アジアの文化的・地域的な特徴や,中国,日本と韓国における大学教授職の共通点や直面する課題,2007年以後のマレーシアにおける大学教授職の変化に関する背景,韓国における高等教育の発展に関する特徴と国際化の進展,台湾における高等教育の管理運営の変化と大学教授職が直面しているチャレンジ,東南アジア地域における質保証の構築や,学生と教員の流動,地域レベルにおける単位互換システムおよび地域レベルにおける研究グループの構築と研究評価制度の確立に関する構想,および最近のアメリカにおける大学教授職の変化などである。

大会報告のほか,会議参加者は,特にアジア特有の文化や価値観や関係諸国間の共同研究およびアジアの大学教授職に関する研究課題などについて意見交換を行った。



## 特別研究報告

### 文部科学省委託調査報告

渡邊 聡

(高等教育研究開発センター教授)

高等教育研究開発センターでは,「平成21年度先導的の大学改革推進委託事業・大学院における教員の勤務実態に関する調査研究」(事業期間:平成21年8月~平成23年3月)を文部科学省より受注し,昨年度から調査研究活動に従事してまいりました。本調査研究は,①大学院担当教員の勤務実態,②教員と非教員スタッフの業務実施分担,③大学における教育・研究を含む諸業務の処理体制,を明らかにすることにより,知識基盤社会における大学院教育および研究に注力すべき教員の業務実施の集中と効率化に資することを目的とするものです。

上記調査項目①~③の目的を果たすために,平成21年度の研究活動としてまず,先行する調査研究成果の整理および再分析,国内外大学(国内10大学およびアメリカ7大学)への訪問調査と各大学での人文社会系・理工系・医歯薬系学部・研究科に所属する教員の聞き取り調査を実施しました。これらの調

査研究結果は平成21年度成果報告書としてまとめ、昨年3月に文部科学省に提出しました。今年度は、平成21年度活動としておこなった分析および聞き取り調査結果を踏まえ、平成22年6月に3名の学外委員をお招きし、三菱総合研究所（再委託先）において第3回アドバイザー委員会を開催しました。アドバイザー委員会では、本調査研究における諸問題の実態をさらに解明するためのアンケート調査について、委員の方々からアンケートを設計する上での留意点や質問項目等についてご意見を頂戴しました。これらの意見を踏まえ平成22年7月～10月にかけて「専攻向け」および「教員向け」アンケートを設計し、11月～12月にかけて大学院教育を担当する教員の勤務実態や従事内容に関するアンケート調査を郵送（専攻向け）とウェブ（教員向け）にて実施しました。

アンケート対象となった200専攻のうち118専攻から有効回答数が得られ（回収率59%）、個人教員向けに実施したウェブアンケートでは1,512名からの有効回答を得ることができました。回収されたアンケート結果を定性的および定量的に分析したものは平成23年2月までに最終報告書（案）としてまとめ上げ、第4回アドバイザー委員会（三菱総合研究所にて開催）において3名の委員からご意見をいただきました。アドバイザー委員会後に修正を加えた最終報告書を、平成23年3月に文部科学省高等教育局に提出しました。

## 頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム

福留 東士

（高等教育研究開発センター准教授）

2010年度から始まった日本学術振興会の新規事業「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に、当センターが申請した事業が採択されました。2012年度までの3年間・総額約7千万円の事業となります。広島大学からは唯一の、全国の人社系では12件中のひとつとして採択されました。

「頭脳循環プログラム」の趣旨は「若手研究者が世界水準の研究に触れ、世界の様々な課題に挑戦する機会を拡大するとともに、海外の大学等研究機関との研究ネットワークを強化する」こととされています。採択されたセンターの新事業「知識社会を先導する大学知の考究－新時代の高等教育の展開と人材育成－」では、これまで RIHE の諸先輩方が築いてこられた国際共同研究の基盤を活かして、世界の7つの高等教育研究拠点との連携により研究を展開する予定です。若手研究者の派遣を通して連携先拠点との長期的ネットワークを構築し、海外研究者との協働の中で国際性を持った高等教育研究の展開を目指していきます。

本事業の海外連携拠点

米国	ペンシルバニア州立大学高等教育研究センター
	カリフォルニア大学バークレー校高等教育研究センター
	ジョージワシントン大学教育学研究科
英国	オックスフォード大学日産日本研究所
ドイツ	カッセル大学高等教育研究国際センター
ノルウェー	オスロ大学教育研究所
オーストラリア	メルボルン大学高等教育研究センター

本事業では、主要な研究課題として、Ⅰ「知の社会的基盤としての大学」、Ⅱ「知識創造型大学院教育」、Ⅲ「思考力と統合力を培う学士課程教育」、Ⅳ「大学知を支えるプロフェッションとしての大学教授職」の4つのテーマを掲げています。世界の高等教育の課題はさまざまですが、中核的な課題として大学院教育と学士課程教育を据え、大学知を支える大学教授職のあり方、そして現代高等教育の基盤を形成する知識社会と大学との関係を探求するという構造です。こうした構造のもとで、各派遣研究者の関心と連携先機関の特質に応じてより具体的な研究テーマを設定しています。

本プロジェクトの特徴は、現在センターを挙げて展開中の戦略的研究プロジェクトとの連携にあり、上記課題は戦略的研究プロジェクトの課題と深く関わるものです。ふたつのプロジェクトを連動させる



ことで、相乗効果を上げていきたいと思ひます。

研究組織にはセンター教員の他、学外の若手研究者数名に加わっていただひています。2010～2011年度の研究計画は以下の通りです。今後、さまざまな機会を通して、本事業による研究成果をコリーグの皆様にご報告し、また日本の高等教育研究に還元してきたいと思ひます。

2010～2011年度の若手研究者派遣計画

派遣者	派遣先	派遣先での主な研究テーマ	派遣期間
渡邊 聡	カリフォルニア大学バークレー校 高等教育研究センター	大学教員の教育研究活動の実態調査／ 高等教育機関における持続可能な退職 給付制度の在り方に関する調査研究	2011年2月～ 2012年3月
田中 正弘 (弘前大学)	オックスフォード大学日産 日本研究所	イギリス高等教育における学外試験委 員制度の実態調査	2011年2月／ 2011年8月～ 2012年3月
福留 東土	カリフォルニア大学バークレー校 高等教育研究センター	米国における学士課程教育の歴史と現 状に関する研究／高等教育のガバナ ンスと質保証	2011年3月
島 一則	ペンシルバニア州立大学 高等教育研究センター	大学の社会的効果に関する研究／ 大学の機能と財政に関する研究	2011年4月～ 2012年3月

## 高等教育公開セミナー報告

### 平成22年度高等教育公開セミナー「知識社会と大学教育」

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

主として大学教職員向けに例年開催している高等教育公開セミナーを、平成22年度は8月19日(木)から20日(金)にかけてセンター内で開催した。今回は、文部科学省の委託を受けて進めている戦略的研究プロジェクトとの関連を図りつつ「知識社会と大学教育」と題して、センター教員9名によって講義を行った。セミナーへは学内外から17件の参加申込があった。

セミナーの内容は以下の通りである(各講義1時間10分)。1日目(講義1～4)は日本における関連諸課題、2日目(講義5～9)は国際的動向をそれぞれ取り上げた。

- 講義1 知識社会と大学～大学改革はなぜ必要か(山本眞一)
- 講義2 教育改革と大学教員(小方直幸)
- 講義3 大学・大学院教育と所得－所得関数分析に基づく現状紹介－(島一則)
- 講義4 知識社会における大学院教育の課題－法科大学院教育を事例として－(大膳司)
- 講義5 学士課程教育とは何か－アメリカとの比較を通して－(福留東土)
- 講義6 アメリカにおける大学教育の質保証(北垣郁雄)
- 講義7 知識基盤社会と大学院教育－中国の事例研究を中心に－(黄福涛)
- 講義8 大学と社会－許容された時間(秦由美子)
- 講義9 社会と大学－フランスにおける大学教育－(大場淳)

講義後のアンケート(匿名)では、当年度の参加者が少ないことを反映してか、講師と参加者間の意見交換が例年以上に活発に行われた様子が見られた。

## 高等教育公開セミナー in 大阪に関する報告

渡邊 聡

(高等教育研究開発センター教授)

当センターでは、公開セミナー、国際セミナー、研究員集会等をとおして高等教育研究の成果をタイムリーに社会に還元するための活動を行っていますが、毎年夏期にセンター内において開催している高等教育公開セミナーが好評をいただいていることから、2010年12月4日（土）に、高等教育研究開発センター公開セミナーとしては初めての試みとなる関西地域（大阪・中之島）でのセミナーを開催しました。当日は、土曜日午後の時間帯であったにもかかわらず、関西地域の高等教育機関に勤務する事務職員、教員・研究者だけでなく学生や民間企業からの参加者を含む24名の方々に、会場となったキャンパスイノベーションセンター（CIC）大阪にお集まりいただきました。

当日のセミナーの内容は以下のとおりですが、講義スタイルのセミナー1～4（各30分）のほかにワークショップ（60分）では、グループに分けられた参加者が与えられた課題に対して各グループ内で議論し発表するといったインタラクティブな学習の機会を設けたのも新たな試みでした。また、今日のグローバル社会における高等教育の役割や教育カリキュラム、教職員の能力開発、高大接続、職員のキャリア、大卒者の就職問題等について全参加者と一緒に考えることを目的としたため、高度な予備知識を必要とする専門的な内容に偏らないように配慮しました。

- セミナー1 『大学改革と職員の役割・能力開発』（山本眞一教授）  
ワークショップ 『高校と大学の接続を考える－教育目標を達成するための入学者選抜方法－』（大膳司教授）  
セミナー2 『人材育成と大学カリキュラムの開発』（黄福涛教授）  
セミナー3 『大学の個性化と多様化』（福留東土准教授）  
セミナー4 『高等教育組織と労働市場』（渡邊聡）

公開セミナー後のアンケート（匿名）では、ワークショップ以外の各セミナーが30分であったこともあり、時間が短すぎるといった意見はみられましたが、参加者からは概ね肯定的な評価・コメントをいただくことができました。今回、初めての試みとなった「公開セミナー in 大阪」ですが、今後も広島大学東広島キャンパスや広島県内に止まらず、他地域における高等教育公開セミナーを企画・実施し、本センターの研究成果を生かしていきたいと思えます。

## 2010年度の公開研究会

\* 肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テーマ
第1回 (2010/5/17)	史 静寰氏（中国・清華大学教授／教育研究院常務副院長） 袁 本涛氏（中国・清華大学教授／教育研究院副院長）	新しい視点からみる学士課程教育質評価 世界一流大学育成における大学院教育－構造と質－
第2回 (7/7)	デイビッド・ターナー氏（広島大学教育学研究科客員教授／英国・グラモーガン大学人文社会学部教授）	大学ランキング：世界的水準の大学並びに良い大学の概念
第3回 (7/29)	田中 秀明氏（一橋大学経済研究所准教授）	高等教育における評価と資源配分：諸外国の経験と日本の現状
第4回 (8/9)	ピーター・マーセン氏（ノルウェー・オスロ大学教授）	ヨーロッパ高等教育と知識経済
第5回 (2011/3/2)	ニコル・ポトー氏（フランス・ストラスブール大学教育学部教授）	大学における教育及び学習の質保証： ストラスブール大学（フランス）の事例

## センター往来 [2010年4月～2011年3月]

\*肩書は当時のもの（敬称略）

(2010年)

- 4月 なし  
5月 史 静寰, 袁 本涛 (清華大学/教育研究院)  
6月 **フルブライト国際交流プログラム** [Susan E. Carvalho (ケンタッキー大学) Joe G. Delap (ジャクソンヒル州立大学) Kim L. Kreutzer (コロラド大学ボルダー校) William B. Lacy (カリフォルニア大学ディビス校) Marie H. Martin (バンダービルト大学) Donna Scarboro (ジョージワシントン大学)]  
7月 David A. Turner (広島大学・客員教授/英国グラモガン大学) 田中 秀明 (一橋大学経済研究所)  
8月 Peter Maassen (オスロ大学)  
9月 小貫 有紀子 (九州大学)  
10月 萩田 仁 (内田洋行教育総合研究所)  
11月 片山 剛 (横浜国立大学) **国際ワークショップ及び第38回研究員集会招聘者** [Bruce Johonstone (ニューヨーク州立大学バッファロー校・名誉教授) 吉田 文 (早稲田大学) 謝 維和 (清華大学) Peter Maassen (オスロ大学) 館 昭 (日本高等教育学会長/桜美林大学) 天野 郁夫 (東京大学・名誉教授) 徳永 保 (文部科学省/前高等教育局・局長) 小林 哲夫 (朝日新聞出版) 矢野 眞和 (昭和大学) 小方 直幸 (東京大学)]  
12月 なし

(2011年)

- 1月 相田 美砂子 (広島大学) 大南 正瑛 (元立命館大学総長)  
2月 **CAP 国際会議招聘者** [William Cummings (ジョージワシントン大学) Ulrich Teichler (カッセル大学) Martin Finkelstein (シートンホール大学) Jung Cheol Shin (ソウル国立大学) Fengqiao Yan (北京大學) Hsiou-Hsia Tai (中華大学) Supachai Yavaprabhas (東南アジア教育大臣機構高等教育開発地域センター) Vincent Pang (マレーシア国立高等教育研究所/マレーシア科学大学) Keith J. Morgan (ランカスター大学・名誉教授) 有本 章 (比治山大学) 榎本 剛 (文部科学省高等教育局) 山田 礼子 (同志社大学)]  
3月 Nicole Poteaux (ストラスブール大学)

## 新任者・離任者から一言

### 2011 年度客員研究員



大佐古 紀雄(おおさこ のりお)  
育英短期大学保育学科准教授

十数年前ですが、日本の大学研究拠点の発展を修士論文で扱うために、センターの歴史を調べたり、師事しておりました

喜多村和之先生をはじめとする草創期に関わられた先生方にお話をうかがったりしました。当時を思い返し、客員研究員を拝命することの重みをずっしりと感じています。現在は、欧州高等教育、特に質保証を中心に取り組んでいますが、所属の場所柄、学力問題と派生する学生関連の諸問題、資格免許行政と大学との関わり、はては短期高等教育のあり方などにも関心をもたざるを得ない日々です。この機会を自分自身のさらなる学びにつなげつつ、センターはもちろんのこと今までお世話になった方々にも少しでも恩返しとなれば、と考

えています。ご指導ご鞭撻のほどお願い致します。



佐藤 直由(さとう なおよし)  
東北文化学園大学医療福祉学部教授

このたびは貴センターの客員研究員を仰せつかり、ありがとうございます。私でお役に立つことがあれば幸いに思っております。

これまで学問の制度化をめぐる問題、地域社会と大学の関係、学校法人の組織・経営に関わる問題の研究に参加してきました。近年は存続の危機に面した私立大学の再生に身をもって関わり、学校法人の運営のあり方、大学における教育研究のあり方、それぞれの多様な側面に戸惑いも感じとっています。こうした経験を客観的にとらえる作業もしなければと思っています。貴センターでのこの機会を活かし、皆さんからの刺激と学びをたくさん受けとめられるよう努めていきます。どうぞよろしく願いいたします。



**佐藤 由利子(さとう ゆりこ)**

東京工業大学留学生センター  
大学院総合理工学研究科准教授

私の専門は留学生政策の比較分析です。インドネシアとタイの元日本留学生、元米国留学生、非留学者の調査から日米の留学生政策の成果を比較分析し、昨年『日本の留学生政策の評価—人材養成、友好促進、経済効果の視点から』を上梓しました。最近では、留学生受入れによる地方の活性化、EUと日本の学生交流政策と高等教育国際化の比較、留学生による経済効果の国際比較、入国管理・労働・(外国人の)社会統合政策と留学生政策の連携などの研究などを行っています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



**館 昭(たち あきら)**

桜美林大学教授

日本で最初の、そして最も充実した高等教育の研究センターで、30代で得たことのある客員の地位を、60代の今、再びいただきました。以前に上梓した冊子を『原点に立ち返っての大学改革』と題したことがあります(2006年、東信堂)が、その趣旨は「変化をしない大学は衰退する。変化しても原点を失う大学は衰退するか、大学であることをやめる。変化をとげながら、原点を失わない大学のみが、真に繁栄する」というものでした。これを機に、自分自身が若き日に抱きながら、日々諸事に忙殺される中でさて置いてきてしまっている研究の原点、educationの意義を真に体現した教育学の創造の夢に立ち返り、高等教育の課題解明に取り組んで行きたいと思っています。



**野上 智行(のがみ ともゆき)**

社団法人国立大学協会専務理事

私は、広島大学大学院教育学研究科で学び、広島女子大学に奉職後、縁あって神戸大学の構成員となりました。神戸大では、学部附属センター長、附属学校長、学部長、更には、学長職を8年と、通算15年間に渡って管理職を担うこととなりました。学長退任後は、ロンドン大学のInstitute of Educationの客員教授のポストをいただいたことで、念願であった高等教育

研究に専念するつもりでしたが、国立大学協会に呼び戻され、再び大学のマネジメントに直接取り組むこととなり、現在に至っております。

このような、長期にわたる大学のマネジメント経験を高等研の客員研究員として学術的に冷徹に吟味し、現在の職務に活かすとともに、高等教育研究の発展のために何らかの学術的貢献をしたいと考えております。なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。



**橋本 鉦市(はしもと こういち)**

東京大学大学院教育学研究科教授

このたび貴センターの客員研究員の機会を与えていただき、大変光栄に思います。これまで高等教育における制度、政策、文化などの諸領域を、主に歴史社会的なアプローチから考察してきました。この機会に、センターの先生方との公私にわたる交流をさらに深めつつ、新しい試みにもチャレンジしていこうと思っています。また、センターの「宝の山」である図書館にも分け入らせていただけることを楽しみにしております。任期期間中は、どうぞよろしくお願ひします。



**吉田 文(よしだ あや)**

早稲田大学教育・総合科学学術院教授

再び、客員研究員の任を与えていただき、ほんとうに嬉しく思っております。巨大な私学である現在の本務校の、容易には動じない組織がそれでもじわじわと動くさまは、国立の系譜を引く以前の勤務先が政府のダイレクトな力に左右されるのとはまったく異なり、高等教育機関における組織力学を大変興味深く、フィールドワークをしているような気分で眺める日々です。しかし、フィールドに過度に耽溺することなく、わくわくする思いをどのように研究として文字化し、説明することができるのか。高等教育研究の難しさは、このあたりにあるように考えています。与えていただいた機会を十分に活用して、あらためて勉強したいと気を引き締めております。

## 2011 年度学内研究員



相田 美砂子(あいだ みさこ)  
大学院理学研究科教授

8年ほど前から、教育の現場で、新しい大学院教育の設計と実施に取り組んでいます。理学研究科と量子生命科学プロジェクト研究センターを母体として、融合領域の大学院教育と研究推進を目的とした「ナノテク・バイオ・IT 融合教育プログラム」(H15～H19科学技術振興調整費「新興分野人材育成」)を実施し、補助事業終了後も継続しています。また、現在は、博士課程後期生と若手研究員を対象とした「地方協奏による挑戦する若手人材の養成計画」(H21～H25科学技術振興調整費「イノベーション創出若手研究人材養成」(H23から名称変更)科学技術人材育成費補助金「ポストドクター・インターンシップ推進事業」(予定))も推進しています。

広島大学の高等教育のあり方や将来像について考えていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。



小澤 孝一郎(おざわ こういちろう)  
大学院医歯薬学総合研究科教授

私の研究分野は薬物治療学であり、疾患の発症メカニズムの解明と治療薬の開発を研究しており、最近ではメタボリック症候群の発症メカニズムの一部を明らかとし、さらにそれに対する治療薬を見つけ出し、現在特許申請中です。

自分自身の専門とは離れますが、平成18年度より薬学教育は6年制となり、その制度構築のお手伝いもさせて頂いています。また本学では、教務委員会、教養教育委員会、そして学士課程会議と教務関連の委員としてかれこれ10年近くお手伝いをさせて頂いています。この2年間は、学士課程会議議長としてハイプロスペクツの旗振り役として微力ではありますが、全力を尽くしてきました。その間、教育GP「新世代到達目標型教育プログラムの構築」も採択され、その事業の推進も進めています。これからも宜しくお願いたします。



於保 幸正(おほ ゆきまさ)  
広島大学大学院総合科学研究科

ここ1年半程、広島大学の教養教育改革について改革準備室長として取り組んできました。教養教育として学生のどのような能力を育てれば良いのか、また、どのような方法で教育を行えば良いのか、具体的な内容が問われている。特に高校までの教育が大きく変わり、多様な学生が入学してくる状況では、一律の教育方法では学生に対応できなくなっている。教育の改革は直ぐに完成するわけではなく、相当の時間が必要である。その途中では、コミュニティとしての大学の組織力を生かし、学生からの声にも耳を傾けながら、教職員一体となって取り組む必要があろう。是非高等教育の専門家からの助言をお願いしたい所である。



佐々野 克美(ささの かつみ)  
財務・総務室外部資金契約グループ  
グループリーダー

微力ながら大学職員の立場で、大学・高等教育への関わり、高等教育への従事する人材の養成、特に大学運営の企画・実践・評価に携わる高度な実務家の人材育成について勉強させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。



恒松 直美(つねまつ なおみ)  
国際センター国際教育部門准教授

このたび学内研究員をさせていただくこととなりましたこと光栄に存じます。海外の大学院等で学んだ後、2003年度より広島大学留学生センター教育交流部門(2010年度より国際センター国際教育部門)に所属し、大学の国際化に関わって参りました。広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)を担当し、英語で行う授業や地域企業との連携による短期交換留学生向けインターンシップなどを発展させて参りました。大学国際化が叫ばれる中、大学が取り組むべき多くの課題を目の当たりにし、国際社会における高等教育の発展の方向性について思いをめぐらせる日々です。多角的に学びを深められるよう皆様からご指導いただきたく思っております。



**山口 良文(やまぐち よしづみ)**  
財務・総務室副理事(総務企画担当)

広島大学での経験は、総務企画担当の副理事としてまだ1年ですが、このたび学内研究員に就任することとなりました。

国立大学法人を取り巻く環境は依然厳しく、これからは各大学においてさらに限られた資源をどのように有効かつ効率的に運用するかが問われてくると思います。そのためには、教員と職員が一体となって教育・研究・診療・社会貢献等に邁進することが必要です。

これから学内研究員として、日本の高等教育や国立大学法人の運営・動向等をより幅広く勉強させていただき、本学の業務組織の見直しや人材育成システムの推進等を進めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



**勇木 義則(ゆうき よしのり)**  
技術センター技術統括

近年、「教職協働」を基軸とする大学職員に関する研究が活発化する中、その多くは、大学行政管理業務や学生支援業務を

テーマとする事務職員の能力開発や組織改善等であり、技術職員に関する研究テーマは皆無に等しい状況にあります。教育・研究支援における技術職員と教員との関係に視点をおくと、技術職員は、元来「教職協働」意識の強い業務領域にあるものと考えます。大学全体の組織運営の観点に立った「教職協働における技術職員像」を追求し、技術センターの使命である「教育・研究を支える全学視点に立った効率的・効果な技術支援」を目指したいと思います。どうぞ、ご指導よろしくおねがいたします。



**和田 芳弘(わだ よしひろ)**  
教育室教育企画グループ専門員

このたび、学内研究員を仰せつかりました。私は、教育室で教育改革 GP や教育関係の年度計画・評価など学士、大

学院を通じた教育政策全般を担当する部署にあります。これまで教育担当理事の下、様々な教育企画・教育政策に携わったなかで、一番感じたことは、先生方と事務が一致協力して企画・運営でき

る大学が生き残れるというです。教育に関しては、教員の専門分野ですが、教育制度の枠組み、規則の制定など全学的な仕組みは、我々事務も一緒に「教職協働」で実施できるからです。これを機会に、世界や日本の高等教育の理解を深め、大学に要求される内容を適切に教育施策に反映できるよう勉強していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

### 2011 年度教員



**藤村 正司(ふじむら まさし)**  
高等教育研究開発センター教授

4月1日付で着任しました藤村です。就任後の抱負ですが、25年前に前任の新潟大学に就職したときも考えたことがなく、そ

の場その場で何とかしのぐことができればと思っています。個人の研究は本人以外どうでもいいことなので省略しますが、日本の高等教育の将来を見据える上でも、高等教育政策が手詰まりの今、この20年間の大学改革の「小活」はしておかないといけない時期になっていると考えます。総合科学技術会議はどうなったのか、世界的な研究者はどの程度輩出されたのか、ノンエリート型職業教育はどうなったのかです。政策に振り回されることなく、定点観測で研究したいと考えています。暖かい広島では(も)研究に凝らず、普段の生活を楽しみたいと思っています。

### 2011 年度研究員



**小入羽 秀敬(こにゅうば ひでゆき)**

平成23年4月より広島大学高等教育研究開発センターにて研究員としてお世話になることになりました。これまでは東京大学大学院教育学研究科にて私学助成政策や学校法人経営の研究

を中心に行ってきました。今後は、今までの知見や方法論を活かしつつ、国公立大学を含めた、より広い視野に立った高等教育研究を行っていきたく考えております。

日本屈指の研究環境を誇る貴センターで、限られた時間の中でしっかりと成果を出していけるよう努力する所存です。初めての広島生活に慣れないことも多く、先生や職員の皆様にはなにか

とご面倒をおかけするとは思いますが、今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 2011 年度研究支援員



澤田 さと美(さわだ さとみ)

4月より再びセンターでお世話になることになりました。2008年3月に退職するまでの約5年半（COE 研究支援員として約4年半、研究支援員として1年間）勤務させて頂きました。この度、センターに復職する機会を与えられましたことに感謝致しますと同時に、不思議なご縁を感じております。約3年間のブランクがあり、ご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、少しでも皆さんのお役に立てるよう、新たな気持ちで頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。



廣内 大輔(ひろうち だいすけ)

この度、高等教育研究開発センターの大学院博士後期課程に在学したままの状態、事務部門で勤務することになりました廣内大輔と申します。当センターには修士課程に入学以来すでに7年間学生としてお世話になっておりますが、今後はそれに加えて教員や他の学生の皆様をサポートする立場として関わっていくこととなります。高等教育論を専攻する学徒にとってこのような機会を頂けることは、実際の大学運営にじかに接するまたとないチャンスであり最高のインターンシップになると確信しております。大学院で学んだこととこちらの業務で経験することを相互に連携させながら頑張っていく所存です。何卒ご指導のほどよろしくお願い致します。

## 2010 年度離任者



小方 直幸(おがた なおゆき)

東京大学大学院教育学研究科  
大学経営・政策コース准教授

昨年9月末日で広島大学を退職し、東京大学に異動しました。広島大学に就職した年に第一子が生まれ、岡山からの通勤が始まりました。その後は、社会人として失格の業務

の連続でしたが、よき学生、職員、そして同僚に恵まれ、何とか11年過ごすことができました。センターを外から見守る方々、センターという組織、そして何より在職中にご一緒させていただいた構成員の方々に育てて頂きました。改めて感謝申し上げます。原稿提出が遅れた矢先、甚大な被害をもたらした東日本大震災が起き、身内も被災しました。教育研究者である前に、まず人としてどうあるべきか、その意味や重さを改めて心に刻ませる出来事でした。最後になりますが、センターへの恩返し。その力量形成が巢立った者としての課題です。



渡部 芳栄(わたなべ よしえい)

福島大学総合教育研究センター FD 部門  
特任准教授

2008年4月より3年間、RIHEの皆様には本当にお世話になりました。主に大学教育に関する文科省委託事業に従事してきましたが、半人前(でも大きく見積もってますが…)の仕事しかできずにRIHEの教職員の皆様、委託事業のメンバーの先生方には大変にご迷惑をおかけしました。しかし当該委託事業に関わってきたおかげで、2011年4月より福島大学総合教育研究センター FD 部門で働かせて頂けることとなり、本当に感謝しております。日本の高等教育研究のメッカであるRIHEで仕事をさせて頂いた経験は、今後の研究・実務にとって、大変に貴重なものになると確信しております。今後ともRIHE及びコリーグの皆様方のご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。



大黒 昌代(だいこく まさよ)

研究支援員

2004年1月よりの7年間の在職期間中、『大学論集』等出版物の編集、外国人研究員招聘、ウェブサイト管理、高教データの更新等の業務に携わりながら多くの事を学ばせていただきました。特に『大学論集』の編集では、コリーグの皆様方の幅広い視野と深い知識に圧倒されたこと、また大学院生の論文にかけるひたむきな努力に心熱くなったことが強く印象に残っております。

最後になりましたが、至らぬ私を教え導いて下さった教員の皆様、温かくサポートして下さいました職員の皆様、活力を分けてくれた院生の皆さん、

本当に有難うございました。この貴重な出会いに深く感謝し、これからの人生の糧としたいと思います。皆様のご厚情に心から御礼申し上げます。

## 修了生



高森 智嗣 (たかもり ともつぐ)  
博士課程後期修了 (2010年3月)

在籍中は、大学評価論に注目し、「大学評価の活用」について研究を行っていました。現在は、九州大学大学評価情報室の助教として、実際の大学評価業務を担当しています。

自身の研究領域とは別に、在籍中に学んだことは、「成果を出すための技術」だったと思っています。出すべき成果にどのように向かっていくかを、感覚としてではなく、技術として身につけることが出来ました。もちろん、その技術はまだまだ未熟なものなのでこれからも磨いていかないとはいけません。

幸運にも、現在、自身の研究テーマを業務として担当しています。在籍中に得た「技術」を磨き、日本の大学評価、高等教育に貢献していきたいと思えます。



立石 慎治 (たていし しんじ)  
博士課程後期修了 (2011年3月)

5年間もの長い間、沢山の方に大変お世話になりました。歴史にもしもはないですが、もし自分がRIHEではなく別の大学院で学んでいたら、高等教育関連の仕事には就けていなかったのではないかとというのが正直な感想です。いま、高等教育に関わる仕事に携わっているのは、センターの先生方、職員の皆様、先輩たち、同輩、後輩からの導きや支えがあったから、研究を通じて多くの研究者の方々にお引き立て頂いたからこそだと思っています。これまでのご指導ご鞭撻、誠にありがとうございました。修了半年前から東北大学で働き始めていますが、これからは以前にも増して、高等教育の研究や実践に貢献できるよう努めていく所存です。



川崎 博宣 (かわさき ひろのぶ)  
博士課程前期修了 (2011年3月)

入学してから修了するまでの2年間、実に多くのことを学びました。授業や課題をこなすことで学ぶことはもちろん多かったです。多様な経験を持つ同級生や先輩方との院生室で会話や授業外での先生方との雑談、職員の方々との交流からも授業に劣らず多くのことを学ぶことができました。

振り返れば、この2年間はとても短かったように感じます。正直に言えば、授業の課題や論文など日々何かに追われている気がして、いつも忙しいと感じておりました。しかし、それだけに、常に何かに取り組んでおり、とても充実した生活を過ごすことができました。こうした2年間を過ごすことができたのはセンターの皆さまに支えていただいたおかげであり、教職員方や先輩の皆さまにはとても感謝しております。2年間ありがとうございました。



小竹 雅子 (こたけ まさこ)  
博士課程前期修了 (2011年3月)

この2年間という時間は、本当にあっという間に過ぎ去りました。決して楽ではなかったですが、ただ苦しいだけでなく新しいことを学び身につけることの楽しみや喜びを感じる事が出来たお陰で、今日を迎える事が出来たのだと思います。これも、センターの先生方やスタッフの皆様、そして職場の皆様が、いつも私を励まし支えて下さったお陰です。本当に感謝いたします。そして今後も、さらに研究に精進していきたいと思えます。このように前向きな気持ちでいられることを、自分自身喜んでいきます。この喜びを頑張るエネルギーに変えて、一步一步前進していければと思います。未熟者ではありますが、今後も引き続きご指導よろしくお願ひいたします。



土井 雅順 (どい まさのぶ)  
博士課程前期修了 (2011年3月)

高等教育機関に身をおきつつも、高等教育に関する体系的な知識や客観的な視点を持ち合わせていないことに愕然とし、「とにかく学びたい」という思いで高等教育研究開発



センターの門戸をたたいてから、瞬く間に2年が過ぎ去りました。このような私を受け入れてくださったセンターの方々や、様々な場面で協力してくださった学生さんたちに大変感謝しております。

センターは我が国でも屈指の高等教育研究機関です。このような特別な場所で学べることは極めて意義深く、また自分の考えに多くの刺激を得ることができます。ここで得た知見は、私の人生において多くの場面で必ず生きてくることでしょう。

センターの皆様には深く感謝しています。有り難うございました。



西村 君平 (にしむら くんぺい)  
博士課程前期修了 (2011年3月)

本年度、博士課程前期を無事に修了することができ、本当にうれしく思っています。この2年間、RIHEの先生方・スタッ

フの方々、そして院生室の同僚に大変お世話になりました。特に、不出来な私を根気よく指導してくださった主指導の島先生には、誠に感謝しております。本当にありがとうございました。

私は来年度からはRIHEの博士課程に進学させていただくことになります。前期課程で学んだことをベースに一所懸命に研究・学修を続けていき、お世話になった皆様に一刻も早く恩返しさせていただく所存です。これからもよろしく願いいたします。



馬 東曲 (ば とうきょく)  
博士課程前期修了 (2011年3月)

中国の洛陽から来た留学生の馬東曲と申します。研究テーマは日中両国の大学カリキュラムの比較です。

あっという間に大学院の二年間が過ぎてしまいました。時間を十分に利用し、勉強していなかったのは大変残念でした。しかし、このような雰囲気勉強してきて、本当に幸せだと思っています。先生と先輩の皆様のおかげで、進歩し、成長してきました。本当にセンターの皆様感謝しています。卒業は終わりではなく、新しい始まりなので、将来後悔がないように、頑張っていきたいと思っています。

## 新 入 生



呉 書雅 (ご しょが)  
博士課程後期入学 (2010年4月)

博士課程に進学した当初は、厳しいスケジュールに溺れてしまいそうでした。しかしながら、優れた教員・職員及び院生の方々に温かく支えていただき、楽しく充実した研究生活を送ることができました。この1年間を振り返ってみると、すぐに浮かんできたのは、講究・研究会及び国際会議等を通じ研究の視野が広がってきたことです。これを続け、広い分野で問題を探し、自分の強みを活かせる研究を続けることを生涯の目標と自覚して生きようと思います。また今後、留学生の役割を果たすべく、色々な方と交流していきたいと思っています。研究生活は、まだまだ長い道ですが、今後もよろしく願いいたします。



横原 知行 (よこはら ともゆき)  
博士課程後期入学 (2010年4月)

長年の憧れであったRIHEで学ぶことを許され、教職員ならびに院生の方々に支えられながら2010年度を過ごすことが出来、心から感謝しております。知識経営という他の方とは異なるアプローチで研究対象に迫る私にとって、RIHEでの体験はその多くが新鮮であり、多くのことを学ぶことができた一年でした。黄先生や福留先生をはじめとする諸先生方の懇切丁寧なご指導、そして、親切な職員の皆様と協力的な院生の皆さんのおかげで、無事2010年度を終えることができました。どうもありがとうございました。2011年度もどうぞよろしく願いいたします。



大林 小織 (おおばやし さおり)  
博士課程前期入学 (2010年4月)

現在国立大学の職員として勤めております。大学を取り巻く環境の変化、そして大学に求められる改革の中で日々業務を行うにつれ、大学の役割やその改革に至る経緯・背景を正確に捉えたいと思うようになったことが、RIHEへ入学したきっかけでした。この1年間は日常業務を抱えながら授業の準備と復習をするのが精いっぱいでした。いずれの授業も自分にとっ

て必要なものであり、どうしても履修したいという思いから、授業時間や開講日など先生方や院生の方々に無理ばかりを申しあげたのですが、快くご対応くださり、心から感謝いたしております。仕事と勉学の両立は易しくはないですが、大学が職場であり、研究テーマは直接現在の職務に関係することですので、初志貫徹すべく残りの1年も努力して参りたいと思います。



**徐 晓剑 (じょ ぎょうけん)**  
博士課程前期入学 (2010年4月)

徐晓剑と申します。中国武漢市の中南财经政法大学を卒業して、2010年4月に、当センターに入学しました。入学して今までのこの一年間は、私にとって大事な一年でした。指導教官の黄先生のご指導をはじめ、事務室の職員、研究室の先輩方々のご支援で、私の研究も順調に進んでいます。そして学習、生活上においてもいろいろな経験をえました。もっとも重要なのは、私はこの一年間の中で、自分の弱点を発見し、そして卒業してから何をすべきか、何をやりたいか、自分の未来の道を決めたことです。今年、私は二年生になりました。研究活動も生活も一層深めて、がんばりたいと思います。今後もよろしくお願いたします。



**三上 亮 (みかみ りょう)**  
博士課程前期入学 (2010年4月)

私は、大学4年間を臨床に重きをおいた保健医療系の学科に所属し、そのまま広島大学高等教育学研究科に進学したので、入学した当初は高等教育についての基礎的な知識がほとんどなかったために、授業について行くのがやっとでした。しかし、授業での先生や院生とのディスカッションではそういった知識がただでなく、考察する力が必要なために毎時間有意義な時間を過ごすことができました。授業以外にも他の院生や時には教授陣とも論議を交わしたり、何よりも日頃の勉学や修士論文に関して大変な支えとなっていただきながら日々生活を送っています。



**三好 登 (みよし のぼる)**  
博士課程前期入学 (2010年4月)  
2010年4月に国際基督教大学から入学して参りました三好登と申します。入学してから早くも1年の歳月が経過して今年

修士論文の執筆の年です。今年は満足できる論文を書き上げることを目指し、その成果を来年以降、学会報告や論文にすることによって、発信することが出来ればと思っている次第です。今年もどうぞよろしくお願いたします。



**門前 智美 (もんぜん ともみ)**  
博士課程前期入学 (2010年4月)

私は広島大学教育学部を卒業して当センターに入学しました。1年間があっという間に過ぎました。入学当初は、学部時とは違った雰囲気戸惑うこともありましたが、センターの先生や先輩方からの熱心な指導とアットホームな雰囲気によって、戸惑いはなくなりました。また、職員の方々のご支援により、大学院生活を有意義に過ごさせていただいております。更に、同期の皆からは、よい刺激を与えてもらいっぱなしで、感謝の1年でした。

残り1年となりましたが、修士論文にむけ頑張っていきたいと思っております。今後も多くの方にご協力をいただきますが、よろしくお願いたします。

#### 外国人研究生



**呉 嫻 (ご かん)**  
(2010年4月)

2010年10月より、研究生として、センターでお世話になっています。最初は慣れなかったのですが、とまどうことばかりでしたが、指導教官黄先生をはじめ、先生方、事務方、先輩たちに支えられて、大変充実した生活を送るようになりました。また、センターは、さすが高等教育のメッカといわれるセンターです。ここの研究環境は素晴らしいだけでなく、豊富な資料も備えてあり、いろいろなことで、今後の研究もうまくできると思います。センターで行われた全日本及び国際規模の会議や研究員集会にも参加できて、いろいろな体験を得ることができると思います。現在進めている研究は「大学教員を対象とする人の資源管理」についてです。今後も自身の研究活動を一層深めていきたいと思っております。皆様、今後ともどうぞ宜しくお願致します。